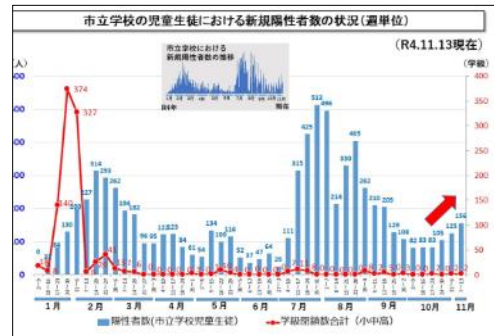


■ **新型コロナウイルスについて**

赤の折れ線グラフで示した学級閉鎖の数は、2月の閉鎖の基準を見直して以来、随分少ない数で推移していますが、青の棒グラフで示した新規感染者数は、10月下旬から再び上昇傾向を見せています。

人々の動きが活発になる年末年始に向け、日本でも第8波がやってくるのは避けられないと言われています。

また、今年の冬は「季節性インフルエンザ」も大流行する可能性があります。各学校においては、これまで以上に気を引き締めて感染予防の徹底を図り、先手先手の対応に取り組んでください。



■ **総合防災訓練について**

10月30日に行われた奈良市総合防災訓練では、市内全64箇所を避難所として開設し、およそ市民6,450人、防災関係機関から400人、市職員が3,300人と、合わせて10,150人の参加がありました。重点会場となった佐保川小学校、大安寺西小学校、西大寺北小学校では、本番さながらの緊張感をもって取り組まれていたのが印象的でした。



佐保小学校での給水車から水を汲む給水体験に参加しました。6リットルのビニル袋に半分の3リットルの水を入れただけでも結構な重さで、普通に両手でもって運ぶのも大変でしたが、背中に背負うととても運びやすく、改めて、自分で体験してみる防災訓練の大切さを痛感しました。



11月13日の「子ども安全の日の集い」において、奈良学園大学の松井先生が、次のように話されました。

学校の安全を推進していこうとすると、
 「そこまでする必要があるのか。そんなことする必要があるのか」といった声が上がってくる。それは、
 「学校の安全に緊迫性がない。誰も明日起こるとは思わないからだ。」

災害も同じです。いつどこで起こるかわかりません。自分が生き残り、家族が生き残り、身近な人が生き残る。そのためには、災害への備えを、いかに「自分事」として捉えられるかが大事です。

災害時では、学校が果たす役割は大きく、「避難所」としての機能を果たさなくてはなりません。

子どもたちへの防災教育はもちろんのこと、学校の先生方も改めて防災マニュアルや危機管理マニュアルを確認し、いざという時に先生方がうろたえることなく、落ち着いて行動できるよう、日頃からの意識付けをお願いします。

■ 小中一貫教育全国サミットについて

今年度の小中一貫教育全国サミットは、福岡県飯塚市で、11月4日と5日の二日間にわたって開催され、飯塚市内にある施設一体型小中一貫教育校の幸袋校に行きました。

この学校では、小学3年生と中学1年生との交流授業で、3年生の「学校自慢をしよう」というテーマについて、中学生と一緒に考えてアドバイスをしたりしながら学びをサポートしていました。

また、小学1年生の教室ではモジュール学習の時間（短時間学習の時間）に中学3年生がサポーターとして入り込み、スクールサポーターのように寄り添っていました。

いずれも、施設一体型の強みをふんだんに生かし、小中学生が交流したり、協働して学習や活動をしたりする場面をうまく設定していると感じました。

事例発表では、施設分離型の小中の取組として、小学生と中学生の教室をオンラインでつなぎ、中学生の職場体験学習の発表会をオンラインに乗せ、オンライン上で小中が質疑応答している取組がありました。こうした取組は、1人1台端末が導入された奈良市でも取り入れることができる実践だと思いました。

また、中学2年生が5年生と一緒に課題解決学習、いわゆるPBL (Project Based Learning) に取り組んでいる授業もありました。

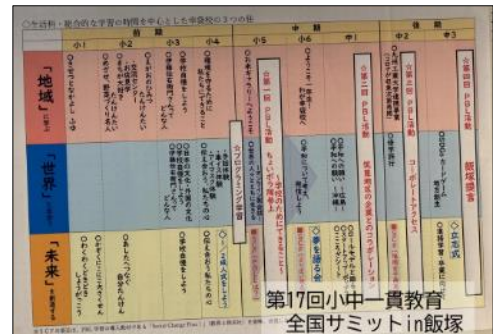
公開授業後の筑波大学の藤田先生による「VUCA（ブーカ）の時代を幸せに生き抜く資質・能力を育成するキャリア教育の在り方」と題した講演では、先行きが不透明で、将来の予測が困難な状態の社会を生きていくためにはPBLが必要だと話されていました。

「不確実な世界」が当たり前になってきた時代において、将来への希望は前向きに生きていくために必要なことだと考えます。だからこそ、子供たちが一定の知識を備えたうえで、その知識をどのように使うのか、また、自分の持っている知識を基に、新たなことを生み出して



いくことができるようになれば、子供たちの今の学びは、きっと将来の人生とつながり、循環していくのではないのでしょうか。そのために求められているのがPBL (Project Based Learning=問題解決型学習)であり、PBLをとおして、様々な人々と繋がりながら、主体的に学び、考え、そして新たな課題を発見していく力が身についていくのだと考えます。

幸袋校では、小中9年間を通して系統的にPBLに取り組まれていました。9年間を「4・3・2」で区切り、1年生から4年生までは人間関係形成能力や社会形成能力の基礎を培いながら課題対応能力を育成、5年生から7年生までは課題解決スキルを磨き、8・9年生では実社会の課題を解決する活動が行われ、小中一貫のシステムを生かし、子供たちが未来に希望を持つことができるよう、今の学びと将来の人生が結びつくよう工夫した取組が実践されていました。



奈良市でも、平成28年に第10回全国サミットを開催し外国語科を中心とした授業公開や、総合「なら」・世界遺産学習を中心とした授業公開、小中が学び合う授業について、全国に発信しました。



それから7年が過ぎ、小中一貫教育の取組が充実、深化しているでしょうか。

奈良市は、全国的に先駆けて小中一貫教育を始めた街です。教育委員会でも効果検証を行っていきませんが、各学校や中学校区での取組を振り返るとともに、小中一貫のシステムをフルに活用した教育活動を展開してください。

サミットで、ある教育長が話されていた言葉です。

制度・施設・ICTはそろった。
 教育目標とカリキュラムは工夫できた。
 縦・横連携可能な教職員集団も育った。
 これからは、授業の質の向上を図るフェーズだと。
 まさしくその通りだと思います。

今ある環境を最大限活用して、今こそ、誰一人取り残すことのない、授業の質の向上を図ってください。

